お茶の水女子大学リベラルアーツとＦＤ公開シンポジウム

平成 21 年 2 月 12 日（木）

全体質疑応答

司会：人間文化創成科学研究科 自然・応用科学系 教授 鷹野 慶子

（鷹野） それでは全体の質疑・討論に入りたいと思いますが、学生と授業を担当されている先生方からのお話、それからコメンテーターの川島啓二先生からのコメント、どういう立場からでも結構ですので、何かコメント、ご質問などございましたら、お願いいたします。

（三浦） 学生の方は、授業をわれわれがどのような設計図で用意していたかというのを、多分初めて聞くのではないかと思うので、そういうのを聞いてみて、どんな印象を持ったのか。1部と2部、意識的に学生の人のを先にして、2部の方の種明かしは後にしたので、それと今の川島先生から出た、大学教育の置かれている全体の状況みたいなことで何か感想があったら、ぜひ聞かせてもらいたいと思ったのですが。

（鷹野） 学生、何かございますか。個人的な、率直な感想を、もしよければ聞かせてください。

（学生Ｋ）意図されたとおり、第2部を聞いて、実はこんな深い考えがあったのだなと思いました。私は先ほども言ったとおり2年生なのですが、1年生の方たちは入学のときにパンフレットをもらったり、説明会が多分あったのですが、2年生はチラシにあるのを見るだけで、個人的な印象としては「ああ、文理融合というのをやるんだ」みたいな感じで、あまり知らなかったので、1部の私も含めた学生のお話と、2部と川島さんのお話を聞くと、そこであまり認識されていないのかなという印象を受けました。やはり生徒からすると、文理融合よりは内容に興味を持って取ったという方が多かったので、もっとリベラルアーツの目的とか、私も聞いて初めて「おお、すごいな」と思ったので、広報活動などをもっと積極的にしていくと、学生の認識ももっと広がるのではないかなと思いました。素晴らしかったので、今後ももっとリベラルアーツの科目を取ってみたいと私も思ったので。以上です。

（学生Ｌ）私は文教育学部の1年生なのですが、シンポジウムではなくて、その前の学生の発表のときにも発表しないで、発表を見に来た感じなのですが、私は大学に入る前からリベラルアーツのことを知っていて、ホームページの方でいろいろ広報されていたので、それを読んで、面白そうな科目ができるのだったら、しかも入る年にできるのだったらという理由もあって、すごく期待してこのお茶大に入って、実際に幾つか授業を受けてみました。

実際に入学式の後の説明を聞いて初めて分かったことも多かったのですが、でも実際に、具体的にどんな感じなのか。理念的なことは分かったのですが、実際はどうなのかというところが分からなかったので、今日のシンポジウムを聞いて、先生方はこういうことを考えて、しかもこういう流れの中で、この授業ができたのかというのがよく分かって、すごく面白かったです。

聞いていて、ここは学生の身から勝手に、ここをこのようにしてほしいという提案みたいな感じなのですが、文理融合ということで、せっかく文系・理系と分けないで、そういう授業が組まれているので、もう少し文理融合のところを強化していただきたいなというのが一つあります。

それから系統立てて、系列を作って、せっかく科目設定をされているので、科目間の共通の流れではないのですが、つながりみたいなのがもう少し分かるような授業ないし説明があれば、あるいは、シラバスの方に書くなりということがあったら、もう少し体系立て授業を受けてみようという人が増えるのではないかと感じました。

一つ疑問だったのが、系列というのがせっかくあって、しかも、その中の一個一個の授業を先生方はいろいろ工夫されて、考えていらっしゃるのですが、その間の先生同士のやりとりというか、連携というのはどのようになっているのかなというのを、シンポジウムを聞きながら感じました。

授業ごとに、先生方が何人かでやる授業と、一人でやる授業というのがあったのですが、何人かの文系の先生、理系の先生両方集まった授業というのは、両方の視点が聞けて面白かったのです。やはり一人の先生でやっている授業というのは、先生の専門で、文理融合というのをちょっと感じにくかったなというのが印象です。

Copyright 2008 Ochanomizu University, All Rights Reserved.

（鷹野）　今のお話の中の一つ、科目間の担当者の打ち合わせといいましょうか、相談というのはされていると思うのですが、そのあたりについて、どなたかご説明いただけますか。

（村田）　今年度、三つの系列が発足して、来年度二つの系列が発足しますが、今まで発足した三つの系列では、少なくとも系列間で教員が会議をもって、それで話し合いをするということにしています。実際には1回か2回しかしていないのですが、その中で、少なくとも僕のいる生活世界の安全保障の系列では、やはり横の教員の連携をもう少し深めようという意見が出て、授業の中で、互いの授業をもう少し意識するとか、授業中にほかの系列の授業について触れるとか、そういうことを考えています。

ということで、もちろんこういうシンポジウムを何回か重ねていく中で、系列ごとの狙いということと、それからリベラルアーツ全体の狙いというのを、もう少し教員自身が自覚していって作り上げていくということも意識していると思うのですが。

（鷹野）　ほかにどなたかございますか。

（新井）　私は文教の新井と申します。今回は「リスクの社会史」をやっていましたが、系列としては、私は色・音・香の系列の副世話人みたいなことをやっていて、理系と文系の先生が二人でセットになって一つの系列をまとめていこうということを考えたのですが、その中では、やはり話が食い違うことが非常に多いわけです。むしろわれわれは、その食い違うことを大切にしようと。

例えば、私は前期に色・音・香、感覚の歴史を読むという授業をしたのですが、そこで感覚に関する歴史の本だけ最初はリストアップして、ＬＡの本で買ってもらったのですが、来年やるときには、もう少し理系の本を買ってもらおうと。例えばブルーバックスとか、いろいろな、昔のガモフ全集みたいな古い、文系の人だったらあまり読まなかったかもしれないけれども、理系の人だったら「これはちょっと簡単すぎる」とか、「そんなの自分で買って読めばいいんだ」みたいな、そういう最初に取っかかりになるような本というのが、あまり理系の本がないなというのは、文系の僕が見て思ったことなのです。

だから、そのように相手のものにちょっかいを出しつつ、お互いにすれ違いを大切にして、文理ということを考えていくことが大切かなということは思っています。系列の中の交通整理なども、やはりお互いに、先ほど村田先生が、歴史の授業を聞いていて、理系の先生が歴史の授業を聞くと、こういうところに関心を持つのかというのが今日はよく分かって大変面白かったのですが、そういうことをお互いにやることが大切かなというのは一つ思いました。

もう一つ、系列で取る、五科目取ったら系列履修になるということが意味があるのかというのは、私も今日はすごく思いました。つまり、系列で取ることの意味ということを、われわれはあまり考えていないのではないかと。つまり、卒業証書に「系列であなたはこういうテーマについて学びましたよ」というのを与えるということは、学生に対しては意味があるのだろうと思うのだけれども、われわれは相互関係の位置付けということをあまり深く考えていないと。

先ほど亀山さんが最後に、生活世界の安全保障の中の科目を三次元図みたいにして出したやつ、あれはパンフレットにあったものですよね。あれをわれわれが意識して、この中のここに私の授業は当たりますとか、そういうことはあまり言わないですよね。小林さんは、すごく意識して言おうとしているとおっしゃっていましたが、全員がそういう意識を持っているわけではないので、そういうことをした場合に、位置付けが分かったから、皆さんがそれで系列を取っていくかというと、その系列で取ることの意味というのをもっとはっきりさせないと、皆さんは相変わらず自分の興味で取っていくだろうと。われわれ個々の関心は、あるものを取っかかりにして、それで今までのディシプリンとは違う物の見方や考え方を自分なりに理解してもらえばいいと、突破口であればいいと思っているから、あまり系列を意識しないで授業をしているかもしれないのです。ですが、もしかして系列ということを考えたら、どんな新しいものが見えてくるのだろうということを、もう少しわれわれも考えなければいけないなというのは今日、皆さんの話を聞いて思いました。

（鷹野）　ほかに何かございますか。実は私がちょっと気になっているのは、理系・・・。ありましたか。

（村田）　私も、今の色・音・香の系列の代表をやっているので、間の関連があまりよくないというのは、ちょっと耳が痛かったのですが、一応何度か集まってお話はしているのですが、先ほど新井先生がおっしゃったみたいに、だから色・音・香、全部ぎっちりやれというようには言わないようにしているのです。そうしてしまいますと、本来の面白さというか、その分野自体の教えたいものがありますよね。先ほどの学生もちょっと言っていましたが、それに偏りすぎると、またそれはそれで問題があるので、その分野で教えたいことは大事に残していただいて、だけど導入として、そういう共通の線を残して面白みは与えようという理解で、みんなでやっていたという感じがしますので、今日の話は、良いところも悪いところもどちらもあったような気がしましたので、しょうがないかなという感じがしました。

それからもう一つ、先ほどの話で面白いなと思ったのは、知識「肥満」社会という言葉がありましたよね。これはなかなか面白いなと思ったのですが、体系化してはいけないということはないのでしょうが、私などは食物栄養ですから、本当に肥満社会というのはすぐ出てくるのですが、でも、肥満はいけないのですが、食べないのもいけないのですよね。われわれの分野は大抵

Copyright 2008 Ochanomizu University, All Rights Reserved.

そうなのですが。ですから、適切に食べると肥満ではなくなるのですが、食べないと、それはそれで問題になりますので、多分知識も同じことで、今のは、肥満は多分問題なのでしょうが、やはり適切な過去の知識の体系というのですか、例えば数学なら数学、化学なら化学という、それをきっちり学ぶということも忘れてはいけないことで、それがあった前提で、やはり肥満にはなってはいけないと。そのように私は理解したのですが。ちょっと感想です。

（鷹野） ありがとうございました。時間は予定よりだいぶ過ぎているのですが、私が先ほどちょっと言いかけた、今日は食物の専門の方がお話しくださったのですが、今日の発表の中には理系の学生の声というのはあまりなかったので、私は理系なものですから、もしも理系の学生の声を知っていらっしゃる方があれば、ちょっと情報を提供いただければと思ったのですが、どなたかございますか。

（村田） すみません、先ほどちょっと紹介しましたが、私どもは学生の感想を毎回全部書いてもらって、毎回それを読んでいたのですが、私は意外に面白かったなと思うのは、文系の学生にも理系の学生にも比較的評判が良くて、文系の学生は、私はなるべく易しくしゃべって、高校の化学や生物で出てきたことをなるべく使って、あとは中学校の算数ぐらいですかね。そうすると「ああ、習ったことある」とか、「これはこういう意味なんだ」とか、結構後で感想を書いてくれて、それはよかったと思うのです。文系の学生は文系の学生で、「食べるというのは、あまりにも当たり前のことなのだけど、ちゃんと自然科学的な意味があったんだ」という感じがあってよかったですね。それから理系の学生ですよね。理系の学生も文系の授業を、要するに半分ぐらいを歴史の先生がお話しになったのですが、先ほどうちの学生なども言っていましたが、それが面白かったと。専門の授業に跳ね返ってくるという意味で面白かったみたいですね。目からうろこではないのですが、同じ食べ物を見る視点が、私が普段思っているのと全然違うことを学生が言ったので、そういう話を聞くのは、それはそれで非常によかったのではないかと思います。ですから文理融合は、そういう意味では非常に有効なのだと思いますが、でも、だからといって、先ほど少し言いましたが、自然科学の基盤はちゃんと知らなければいけないのかなという気がしました。

それから先ほど少し申し上げましたが、2年生以降、理系の方は、うちの授業はほとんど取っていなかったですよね。そうしますと、今日の発表者などでも2年生の方が3分の1ぐらいいますかね。そうするとおのずとこういうところへ出てくるのも文系の方が増えてしまうというのは、何となく全体を表しているのかなという感じがしました。

（鷹野） では、今日はいろいろ学生からも、教員の担当の先生方からも、また川島先生からも貴重なお話を伺いまして、意見交換もある程度できたと思います。これからまたリベラルアーツの教育ということをお茶大で推進していく、一つの良い機会だったと思います。今後ともよろしくお願いいたします。

（三浦） 最後、質問が出ていた点だけお答えしたいのですが、文理融合リベラルアーツ科目群というネーミングになっていて、一つの科目が文理融合にはなっていないのです。系列全体で文系・理系の双方から現象を見ていこうと。だから、一つの科目は理系から見ていても、それは構わないのです。ただ、それ以上に意欲的な試みが「おいしさの色・音・香」で、これは中で入れ子になっているというようなものが出てきている。ただ、スタート時点では、そのように考えていました。

ただ、それでは昔と変わらないではないかというと、横の関連ですね。横を意識することで、自分は文系の目から見たこういうことを、理系の目から見たらこのように説明するという、横の連関が大事だというのが最初の設計だったのです。設計図にも書いてあります。だから、課題は、まさに横の連携を、これから教員と学生の間でどのように作っていくのかというのが一番の課題だなと思いました。

それからもう一つ、リベラルアーツのリベラルの意味ということを川島先生の方から聞かれまして、全く同じです。リベラルアーツというのを自在に使える技というように、無理やり訳したのですが、「自由」よりは「自在」で、知識を使っていく主体に私たちがなっていくということが全体の目的だろうと考えています。

先ほどちょっと誤解があったのですが、川島先生がおっしゃったのは知識基盤（・・）社会にこれからならなければいけないということが、日本の大学教育の提言の中に出ているのですが、その意味は、多分知識が衰えているという認識があるのですが、村田先生は、それを知識肥満というように聞こえたのはすごく面白くて、多分理系の方から見ると過剰になっているところがあるのだろうと思うのです。ちょっとした誤解だったのですが、新井さんの言ったことで言うと、受け取り方のずれが出てきて、それもまた面白かったと思いました。

それで今日は、実は学生の人と教員の人で一緒に授業の話をするとやりにくいかなと思っていたのです。そうしたら学生の人も、しらっと良いところと悪いところを言ってくれますし、教員の方も、しらっと受け止めて、何というのでしょうか、川島先生が面白かったと言ってくださったのは、授業が再現されている感じがしたので、初めての試みとして、とても良い機会になったと思っています。

まだ1年目ですので、いろいろ足りないところはいっぱいあると思いますが、私の正直な感想は、1年目にして、よくぞここまできたなと。別にテーマを意識しないで、面白そうだから取ったと。私はそれで十分だと思うのです。授業が面白そうに見えるよ

Copyright 2008 Ochanomizu University, All Rights Reserved.

うに科目名や広報ができたということだけでも十分で、それはなぜかというと、動機づけをもって授業を、学生も臨んでほしいし、教員もやっていかなければいけないわけで、そこの最低限の出発点が確保できた。そして1年間聞いて、さらに問題提起をしてくれた。だから、ちょっと私は楽観的すぎるかもしれませんが、 1年目としては大変十分なところにきていると思いました。どうもありがとうございました。

（鷹野） それでは皆さま、今日は熱心にご参加いただきまして、ありがとうございました。これでこの会を閉じたいと思います。

お茶の水女子大学
Ochanomizu University

Copyright 2008 Ochanomizu University, All Rights Reserved.